

市民が育てる調和のある夜景

夜が長い季節になってきた。夜景が身近なものに感じられる。街にはイルミネーションがきらめく。



夜景の主役はもちろん照明である。夜の街路をイメージしてみる。街路に建ちならぶ建物の窓、外壁に取りついた看板、街路灯、通過していく自動車のヘッドライトとテールランプ。こうした様々な光が、街路をとりまく空間にあり、渾然一体となって街をかたちづくる。

たとえば、住居ひとつ考えてみても、照明はずいぶん変わってきた。これまでは、明るければよい、機能一辺倒で、リビングの天井に白い蛍光灯が煌々と輝いていたりした。

現代は、快適で落ち着いたものが求められる。柔らかな小さな光が、室内の各所に置かれ、陰影をつくりながら、全体としてハーモニーを醸し出す。そんな空間の居心地の良さは言うまでもない。

夜の街路空間も快適なリビングのようでありたい。照明環境が「ナチュラル」になっていくことが望まれる。そのために、ここでは二つの手法をあげたい。

ひとつは柔らかな「間接光」をつかうこと。光源が直接目には入らず、まぶしくないように。光源のまわりに、光を優しく拡散させる



しつらえをつくる。炎を取り囲んだ和紙が光を揺らめかせる、行燈のように。

もうひとつは、それぞれの光を独立させず、互いに関係をもつように、空間の中にグラデュアル（段階的）に配すること。豊かな森の中では、大小の草木それぞれが、関係を持ち、ハーモニーを奏でる。そのように街路の光も調和を保ちたい。

調和のとれた夜景のイメージを市民が育てていくこと。こうして、街を自分たちの部屋のように居心地のよいものができるのではないだろうか。●

松本 大
建築家
Text by MATSUMOTO Dai
都市環境マネジメント研究所 研究員
松本大建築設計事務所代表